
此日

南野彰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

此日

【Zコード】

Z7046B

【作者名】

南野彰

【あらすじ】

友達の肩書きはあたしには大切でそれを崩す勇気も度胸もなかつたから、サヨナラを選んでフリーーターを選んだ。

「名前負けね、完全に。こんなつもりじゃなかつたのに」 いつだつたか、母親が真面目な顔をして私にそう言つた。

ただの気の合ひ友達。

卒業式に告白、なんてオチも無く。

あたしはフリーター

あいつは大学へ進学

腐れ縁ともサヨナラして、満開の桜を背負つて別々の道を歩き出す
予定だ。

「アンタ、フリーターって。カタカナだからカッコいいと思つて
んじゃないでしょうね」

落ちこぼれの私を蔑むように、半ばあたしを投げ出した母親が用も
無いのに部屋へ訪れてはそう吐き捨てる。
飽きないのだろうか。

あたしは何も答えない。何を言つても通じないと勝手に決め込んで、

フリーーターもあたしが決めた道だ。

進学校だった為親にも教師にも反対されたが、あたしはあたしのやりたい事を見つける為にフリーーターになりたいと思ったのだ。大学進学を目標に入学したあたしを変えたのはあいつだった。

「はい」

聞きなれた着信音が鳴り、ワンコールであたしは電話に出る。

『なにシケた声してるん?』

「うむむむ」

母親はいつのまにか居なくなっていた。
ああ、弟の塾の迎えの時間だからか。

「なに? 私忙しいんだケド」

母親の懲りない嫌味の八つ当たりか。少々キツく言つてやる。しかし、そいつは法まことに、にやはは。と楽しそうに笑い、言葉を続けた。

『ちよつと、今から出でこれない?』

「こんな夜に女の子を外に出すのー? 信じられないー」

『ハイハイ。お迎えに上がります、姫。勿論お家までお送り致しますから』

「解ったわ、待ってるから早くして頂戴ね」

姉なんて見たこと無いから知らないけど、取り敢えず使ったこともないような丁寧語で言うと、またそいつはにやはは。と面白そうに笑つて電話を切つた。

お風呂にも入つてあとは寝るだけだから、部屋着だ。
これはあんまりだろう、と理由を付けて、簞笥の引き出しを引っ張る。

迷うのも馬鹿馬鹿しいが、もうこうして夜な夜な一人で会うこともないだろ？と思つと自然と気合の入つた服をチョイスしてしまつ。

誕生日に貰つたネックレスをして行こうか、義理チョコのお返しに貰つたブレスレットをして行こうか。
卒業の記念だと言つて貰つたピアスをして行こうか。

こんなに沢山のモノを貰い、あげてきたのにあたし達は恋人じゃない。

周りはそれを不思議がり、私も少し不思議がつた。

私はあいつの事を好きだ。だけど、私がその一方的な気持ちをぶつける事によつて、あいつのにやはは。と言うふざけた笑い声を聞くことが出来なくなるのは嫌だつた。

周りは、あいつもあたしの事が好きだと言つた。多分そつなんだろう、あたしも思つ（自意識過剰だろうか）

理由だつてちゃんとあるのだ。あたしの誘いを断つたことは無い（正確には一度だけある。それはあいつの部活の大会の日だつた。仕方無い事なのでカウントはしないでおく）

それに、誕生日やらなにやらと、私に何かプレゼントをくれた。
私を慰めてくれた。話を聞いてくれた。頭を撫でてくれたし、胸を借りて泣いたことだつて一度だけある。

それでもあたし達は恋人にはならなかつた。

なれなかつた。

『着きましたよ、姫

ワンコールで出るのももう慣れた。

私は階段をそーっと降りる。

あ、でも母親は弟の迎えに行つたんだ。気付いてからバタバタと慌ただしく階段を降りる。

父親はリビングに居たが、何も言わずに私を見送つた。

「よー。」

見慣れたブルーの自転車に跨がつて、少し寒そうにポケットに手を入れて肩を竦めている。

「母ちゃんは?」

「今居ないから平氣」

「んじや、秘密基地行くか

「うん」

自然に自転車の荷台に乗り、そいつはそれを自然に受け止めて、うりや。と言ついつもと変わらない掛け声で自転車をこぎだした。

秘密基地まで約10分。

何度も、この日の前に揺らぐめく頬り甲斐の無むれつな背中に頭を預けよつと思つたことか。

今日もそれは叶わないんだるつけれど。

「おー今日は星がきれいだ

「本物だあ

あたしが上を向くと少し自転車はぐりついたがすぐ軌道を修正した。一緒に見る星空は見飽きる程あった。こんな星も沢山一緒に見てきた。珍しきじじやない。

「お前、フローターつてバイトとかすんの?」

「するよ。明後日面接

「何のバイトかの?」

「メイド喫茶

「うわ、キツ!」

「嘘じや、アホ。キツいとか言つな

「やませ。

またそいつは笑つ。

秘密基地に着いた。

基地でもなんでもない、ただの「プラン」しか無い公園だ。

自転車を降りて、あたしは左の、あこつは右の「プラン」に乗る。そして「じぐ。

「あんた、大学いつからよ」

「4月6日からだよ。オリエンテーションとかだるこいつの

茶色の柔らかな髪の毛が風に靡いて夜の闇に溶けて消える。ふわふわの、猫毛な事も私は知っている。

「で、呼び出した理由はなに?」

あたしには関係の無い大学の話はもう飽きたので、早速核心に迫つてみることにした。

「んー?」と暫つて口は笑つたままそこは「プラン」を勢い良く「じぐ」した。

「聞きたい?」

「ヤーヤ、むうとして別に。と答える。

「可愛くないよな、ホント」

「知つてゐるでしょ」

うん、知ってる。

と言つてギコギコ壊れそつと「ブランコ」を軋ませながらそいつはまだ
言い出さない。

「お母さん、つむやいの知つてるでしょ? 早く帰らせて」

催促すると、ズズズ、と踵で無理やり「ブランコ」の前後の揺れを止めて首を此方に捻る。

「お前、俺と一緒になる気はないか」

念の為にもう一度言つておくがあたし達は恋人じゃない。
つまり、付き合つていない。友達だ。

「あたし、万年学年首位のあんたと違つて頭良くないから言つてる
意味が解らないんだけど」

「俺の為に食事を作つて、掃除洗濯をしろつてことだ」

「んなもん、家政婦でも雇えба? 将来有望な医大生様」

ムカつく。

何の意味もなく、大学へ行く事をやめたのは、こいつがキラキラ輝く目で将来を語りその為に大学へ行くと言つたからだ。

だから、あたしもそんな風に未来を語れるようになりたくてフリー
ターになつたのだ。
なのに、何を言い出すのか。

「……家政婦じゃ駄目だ。そこには愛がないから」

「…スマヤン、119番…しまじょつか」

「だつて、お前俺の事好きだろ?」

「……」

「翔子」

初めて名前を呼ばれた。

「好きだよ、大好きだよ。もう、愛してるよ」

今更恥ずかしがることはない。気持ちを告げる機会など今までに何度もあったのだから。

にやはは。

彼は心底面白そうに笑う。

悔しかった。何年間も塞いでたことをそこには軽々しくも、言い放つたのだから。

「翔^{かける}だつてあたしの事大好きなんでしょう」

初めて名前で呼んだ。

喉の奥が痒くて、こそばゆい。

こいつもそう感じたのだろうか?

「おう。大好きなんてもんじゃないなあ、愛してるよ。世界で一番、

大好きだよ。お前の全部ひっくりめで、大好き

胸が何回もきゅんきゅんして、このまま収縮して死んでしまうんじやないだろ？

「一緒になるのは、俺が一人前になつてからな。それまで同棲つて事で」

今まで逃げてきた当たり前のシナリオに辿り着いた。
だけど、あたしもそいつもいつもと変わらない表情だ。

「つひの両親、まあ父親は良いとして、お母さんが『了解するかなあ

「任せとけって！バツチリ計画は立ててある」

「マジ？って言いつか、あたしが断る事は想定してなかつた訳」

「うん。だつて、俺が好きなんだから。お前だつて俺が好きだつて
確信があった。て言いつか、そう言いつ公式があるんだよ

「センターで出た？」

「出た出た！」

「やはせ。

「だからさ、お前は俺と一緒に所でやりたい事を見つければ良いよ。
あの家じゃ……窮屈だる。」

「……うさ

「お前は翔べる。何たって、俺が一緒にさ

「……頼りな

「ヒヒヒヒナ

あたしも、元気は元気。って笑つてみた。

そうしたら、これからがぱあっと晴るべくなつの中、心こもっていつがいた。

「何で今まで告白しなかったの？」

「かつこつけたかったの。お前に医大生の彼氏を持たせてやりたかったんだよ」

「ふうん」

多分これは嘘。

だって、こいつは嘘を吐く時右の唇の端がひくつく。
この時は今までに無い位ひくついていた。
あたしと同じ、ただ勇気と度胸がなかつただけなんだりつ。
その点では、褒めてやろうと思つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7046b/>

此日

2010年10月11日02時13分発行